

特集

# 博物館で総合学習



極北を生きる



アンデスの玉手箱



ジャワ文化をまとう



イスラム教とアラブ世界の暮らし



ブータンの学校生活



ソウルスタイル



インドのサリーとカルター



フリコロージュ

「総合的な学習の時間」が小・中学校に本格導入されてから4年が過ぎようとしている。民博でも、学習キット「みんなばつく」（=写真、詳細は7ページ）の利用や展示見学を織り込んだ教育プログラムの開発がおこなわれている。民博がもつ研究資源は、授業に活かすことができるのか。鍵は先生と民博、そして市民ボランティアの連携にある。

## 民博の資源を教育に活かすために

福岡 正太（ふくおかしょうた） 文化資源研究センター

### 「みんなばつく」で深める文化の理解

民博は、世界中から集められたたくさんのモノをもっている。さまざまな社会で実際に使われていたモノは、多くのことを私たちに語りかけている。もし、これらのモノに自由に触れることができたなら、見ただけではわからないいろいろな発見をすることができるだろう。色や形、手ざわりやにおい、重さ、使い心地……そこには、文字で学ぶ知識を補うものがある。

### 民博の資源を活かした教育プログラム

この「みんなばつく」の開発や改良には、たくさんの方の先生や意見が生かされてきた。さらに現在、民博は先生と共同で、「みんなばつく」の利用や展示の見学を核としながら民博の資源を活かした教育プログラムの開発に取り組みは始めている。

### 子どもと展示の仲立ち

一方、学校による博物館利用において一番望まれているのは、博物館スタッフによる解説や指導だろう。現実には、子どもたちと展示の仲立ちをする十分なスタッフをもてない博物館が多いなか、市民ボランティアがその役割を担うケースも増えている。専任の教育スタッフをもちたい民博においては、一昨年発足したみんなばつくミュージアムパートナーズ(MMP)が、展示場での教育活動の実験に積極的に取り組んでいる。

博物館を子どもにとって魅力的な学習の場とすることができるといっては、先生と博物館スタッフ、そして市民ボランティアがどれだけ真剣に協力しあうかにかかっている。民博を舞台にして進められている教育プログラム開発の試みについて紹介する。



民博でおこなわれた教育プログラムのオリエンテーション



モノから異文化に出会える



ワークシートに取り組む小学生



ドラは単調だが、リズムの要になる

小学校は、毎年、六年生が民博に行っている。人権をテーマに、ともに生きることを目指した学習に取り組むなかで、朝鮮文化の理解のため、民博常設展の「朝鮮半島の文化」展示を見学に行くというものだった。資料の豊富さと学校の取り組みの継続性から、民博を利用するのは当然の流れだった。しかし、今回に関しては、躊躇する特別な事情があった。この六年生は、昨年、民博の特別展「アラビアンナイト大博覧会」に行き、衣装を試着したり文字を教えてもらったりとたくさん体験をした。もちろん、常設展も見ている。例年のようにただ見学するだけでは、子どもたちの満足感を得られない。私は、明確な方針を

決められないまま、「総合的な学習の時間」の「共に生きる——在日朝鮮韓国の友だちと共に」の準備を進めていたのだ。「アラビアンナイト大博覧会」で、子どもたちに体験プログラムの指導をしてくれたのも当時発足間もなかったMMPのメンバーだった。民博の展示を活用した学習プログラムの開発に取り組みはじめたMMPの協力の下で、授業を工夫することができそうだった。伏見南浜小学校は京都朝鮮第一初級学校と一六年に及ぶ交流があり、向こうの子ともたちを招いて、楽器の演奏や踊りなどを全校児童に見せてもらったり、学校紹介をしてもらった

りしている。例年、六年生は、学校訪問をして向こうの六年生に学校案内をしてもらい、一緒に遊んでくる。今年度は、昨年の民博での活動を踏まえ、グループごとの交流会で、シングルを教えてもらったり、最後には、一緒にチエギチャギで遊んだりしてすっかり親しくなつて帰ってきた。友だちになつた人のことをもっと知りたいという思いを相手の文化を知ることへと高めることが、民博での学びへと結びついていく。

**民博にやってきた**

民博でのプログラムは、全員に向けての三〇分のオリエンテーションに続き、一三、四人からなる六つのグループに分かれて二〇分間ずつのプログラム六つを体験し、最後に二〇分間のまとめをおこなうという構成だった。六つのグループが六つの場所を二〇分ずつ回るといのは、シンプルで子どもたちにも伝えやすかった。

MMPからはじめに提案されたもののうち、ビデオ上映については、直接体験を重視したいという点からはずしておこうと考えた。それに、民博のビデオは、そもそも小学生向きにはできていない。

一方、伏見南浜小学校では、読み聞かせの研究をしている元教員が、

年に二回ボランティアで全学年に読み聞かせをしたり、教員が月ごとに回りの学校へビデオ放送を使って絵本などの読み聞かせをしている。そこで、MMPのメンバーで読み聞かせの活動を続けておられる方をお願いした。

まずオリエンテーションで、プロジェクトを使って、絵本「フリちゃんの子」を読んでもらった。これは、現代韓国の都会に暮らす子どもが田舎へ行き、昔ながらの行事に触れるという内容である。子どもは展示物を見ても昔ながらのものか新しいものか区別がつかないことが多いので、理解に役立つのではないかと考えた。

続けて、楽器の演奏を全員で聴いた後、子どもたちはグループごとに分かれていった。六つのプログラムのひとつに、酒幕(家。旅人の憩いの場。実物大複製。入ることができぬ)のなかでオンドルにあたりながらの読み聞かせがあった。そこでは、日本の昔話に似通ったものや朝鮮独特の感じがするものをお願いした。似通った文化、また、異なる文化への思いをもたせたかった。

語り手がチマチョゴリを着て読み聞かせ、オンドルに当たるには立て膝のほうが暖かいという実用性を伝えるものすばらしいプランだった。立て膝や、ご飯茶碗を手にもたないといった

「総合的な学習の時間」を民博で民博の社会連携スタッフからみんなくミュージアムパートナース(MMP)とともに授業を作らないかと提案を受けたのは、願ってもないタイムリーなことだった。

私の勤務する京都市立伏見南浜

「聴く」から「演奏してみる」へ  
「始作(さあ、始めましょう)」  
指導者の掛け声で、それぞれの楽器がリズムを刻みながら響き合い、心地よい音楽になる。四人の子どもたちは、今、楽器を手にしてそれぞれのパートのリズムを順に教えてもらったばかり。それが、指導者の小さな鉦(ケンガリ)に合わせて一心に楽器を打ち鳴らし見事に合奏していく。予想通り、子どもたちは抵抗なく演奏を楽しんでいた。異なる文化の音楽を、聴くだけでなく実際に演奏すること。これは、このプログラムでもっともこだわったスタイルだった。



教えてもらったばかりなのにすぐにリズムを覚えて演奏する。民博セミナー室にて



チマチョゴリは日本人にも結構似合う



酒幕の外でチエギチャギ。すぐ上手に遊べる

# 体を通して学ぶ子どもたち

## みんなくミュージアムパートナースとともに

今井 ユミ (いまい ゆみ) 京都市立伏見南浜小学校教諭

作法の違いはその国の文化であつて、日本の価値観でははかれないということも、同時にきちんと伝えておきたかった。

小学生は結構やる！

体験という点では、楽器があるならば見たり聞いたりするだけでなく、ぜひ演奏させたかった。チャングなどの打楽器で四小節程度のものならば、リズム打ちを音楽の授業で楽しんでいる子どもたちであり、簡単なリズムをパートに分かれて打つことはきつと楽しいに違いない。二〇分の時間ではとても無理といわれていたが、冒頭の場面のように子どもたちは苦もなく楽器演奏をやり遂げた。指導担当の方



「みんぱく」のなかにあった箸は金属製でとても長い

が、二時間以上にわたって次々と代わる子どもたちに丁寧な指導をしてくださったことも大きかった。

衣装の試着プログラムでは、着付けをする人数に限りがあり、二〇分全員は無理ということだったが、子ども同士で着せ合うことで衣装の数さえ確保できれば、かなりの人数が試着できる。小学校の六年生は、着ることも着せることも喜ぶという、自立した年ごろである。MMPの心配をよそに、本番では女子用五着と男子用四着の衣装を次々と着たり着せたりしていく。衣装を着けた姿を互いにカメラで写し合う時間も十分取れた。



酒幕の外をスケッチ。大きなかめは何に使うのだろう

ヤギでしつかり楽しんでた。すぐに遊べたのは、一度、初級学校でやっていたからだ。しかも、前回と比べてキンキラの飾りがあるほうがやりやすいとまで気がついている。

酒幕での読み聞かせを待つ間、外観のスケッチをしたり、家のなかの様子をみたりしていた子どもたちが促されて家のなかに入っていく、床の暖かさに「ああ気持ちいい」と床にころころと寝転んでしまう場面もあった。理解は今できなくとも

「みんぱく」を使ったプログラムでは、ソウルの小学校に通う男女の子どものもち物などが並べられた。男女のリュックの似通った点に子どもたちの関



屏風には、両班の理想的な人生が描かれているらしい

心がいったが、このあたりの関心のもち方は、大人の思惑を超えていて、狙いと外れてしまうこともあり、物集めの難しさを感じた。それでも、給食に使う長い金属製の箸やスプーンには文化の違いを感じ取っていた。民博の展示物の利用については、限定した提示が必要に思う。確かに民博の物のもつ圧倒的な力は、説明がなくても見るものに強く訴えてくる。しかし、子どもによつて受け取りかたに大きな差が生まれるからである。また、展示場のなかで、ひとつは全員が立ち止まり、じっと見て感じるものが欲しい。支配層である両班の屏風や、村境に立てられる像のチャンスンに向き合ったことは記憶に残るようになるだろう。知的な理解は、不十分でも、後で意味がわかつてくることもある。

今回のプログラムは、子どもに説明するというのはほとんどない。けれど、豊富な民博の財産を使つて、MMPの多大な労力に支えられて、楽しみながら体を通して感じたり考えたりしたものは心に残る。ばらばらになった学習の断片がいつか子どもたちのなかでひとつにつながり、より豊かな在日朝鮮韓国の友だちとともに生きることに繋がっていくことを願っている。

# 進化し続ける「みんぱく」

高市 亜紀

(なかいちあき)

情報企画課情報企画係

## 子どもたちの興味を喚起

民博の貸出教材である「みんぱく」の運用を開始して現在四年目に入った。当初から大変好評で、年間一四〇件ほどの利用がある。利用者の約半数が小学校で、総合学習、国際理解教育、人権学習、民博への校外学習のためといった目的で、事前学習、事後学習、学習発表会などに利用されている。それらの学習のなかで、「みんぱく」は、子どもたちの興味を喚起したり、実際にモノに触れる体験で知識を補うものとして位置づけられているようだ。

「みんぱく」の利用者には使用した感想をアンケートで答えていただいている。利用者の生の声は、今後の改善や、新バック作成の指針として貴重な資料となっている。実際に先生が子どもたちと利用して初めて気がつくことなど、博物館で日々「みんぱく」の管理者として触れている者が思いもつかないこともアンケートは教えて

くれる。総合学習の現場において、「みんぱく」は更なる改良を求められていることを実感する。また同時に肯定的な評価もたくさんいただき、さらに充実させたいと思う力にもなっている。

## アンケートから見る「みんぱく」の役割

アンケートから利用者の声を少しご紹介しよう。

「同じ「調べる」という活動でも、インターネットを使った活動と、実物を使った活動では子どもたちの反応がちがう。実際に触つてみることで多くのことを発見し、多くのことを感じるこができたように思う」

「本物には、はかりしれない存在感と説得力がある。バックの中身を見せたときの子どもたちの反応や目の輝きは忘れられない」

「得た知識を定着させるのにもとても有効である」

### 8種類の「みんぱく」

バック名	バックの中身
極北を生きる …カナダ・イヌイットの アノラックとダッフルコート	トナカイやアザラシの毛皮でできたアノラックやブーツ、布製のダッフルコート。
アンデスの玉手箱 …ペルー南高地の祭りと生活	ティンタ村の人たちの日常着と祭礼衣装、たくさんの楽器。
ジャワ文化をまとう …サルンとカイン	インドネシア・ジャワ島の人たちの衣装や装身具、衣装に施されているバティックとよばれる、ろうけつ染めの道具など。
イスラム教とアラブ世界のくらし	衣装のほか、イスラム教にかかわる祭具や日用品。
ブータンの学校生活	子どもの日常着や学校で使っている教科書やノート、弁当箱。オプションとして弦楽器「ダムニョン」も用意。
ソウルスタイル …子どもの一日	ソウルの子どもたちが使っている学用品や衣装。オプションで楽器バックと布団バックを用意。
インドのサリーとクルター	インドの民族衣装のサリーとクルターのほか、装身具など。
プリコラージュ	ブリキ缶バック、タイヤのサンダルなど、プリコラージュなモノのたちや特別展の作家の作品と制作風景紹介など。

\*写真は2ページ参照。教育機関、各種団体等に貸し出しをおこなっています。まずはご連絡ください。  
\*申し込み・問い合わせ先 / 「みんぱく」担当係 TEL:06-6876-2151 (代表)  
\*ホームページ / http://www.minpaku.ac.jp/museum/kids/minpack/

か得られない何かがある。たとえば、バックのなかのモノを通して異文化と出会ったとき、それを実際の

生活に使っている人たちに思いを馳せ、世界にはいろんな生活を送っている人があるのだと気づくことであったり、

自分の日常に再度目を向けることであったり……それは十人十色であったりもいいた。

これからの「みんなばっく」

昨年の夏、利用を考えている方などへ参考になるよう、活用事例を紹介する「さのみんなばっく」というページを当館のウェブサイトに開設した。実際に学校を訪問して、授業に参加させていただき、授業の様子を全体の流れがわかるように写真入りで紹介している。いろいろな利用法を共有できればというスタッフの思いと、利用者の声から実現した「みんなばっく」の新たな展開である。これは担当者にとっても非常に大切なことである。バックの利用現場を見ていると、さまざまな課題が鮮明に浮かび上がってくる。バック内の情報の充実、視聴覚教材の充実、バックの種類の充実等、アンケートにもよく書かれていたことだが、実際に目の当たりにすると課題の具体的な姿と、それに対する解決策の糸口が少しずつ見え始める。

利用者の声をすべて実現することは難しいが、できる限り形のあるものにしていきたい。これからも、もっと学びの楽しさを感じることができるよう、「みんなばっく」は進化を続けていく。



韓国と日本の教科書の違いを比べてワークシートに書き出す



日本と韓国の伝統衣装の違いについて気づいたことを発表



グループの発表後、全員で「みんなばっく」のモノを見学する

# フィールドワーカーになってみよう

## 協働プロジェクト実践の現場から

加藤 謙一

(かとうけんいち)

文化資源研究センター研究総関研究員

触れて学びを深める

「これサササや。何でできてるんやろ」  
「うわっ、この服、臭うわー」

九月のある日、豊中市立泉丘小学校では、民博の学習キット「みんなばっく」と五年一組の子どもたちとの出会いが始まっていた。彼らが手に取っているのは、「極北を生きる——カナダ・イヌイットのアノラックとダツフルコート」バック。アノラックの放つ強烈な臭いに対する子どもたちの反応を確認して、担任の中野義澄教諭が筆者に説明を促す。異臭の正体は、アノラックの素材であるカリブーの毛皮であること、零下三〇度くらいになる極北の地では、その臭いがほとんどしないことを伝えると、教室中から驚きの声が上がった。

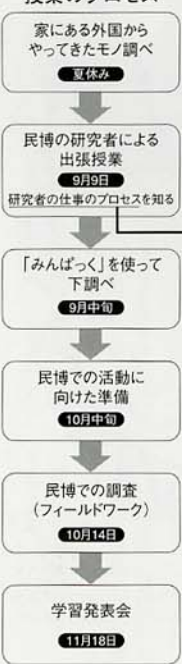
子どもたちに話した内容は、「みんなばっく」に入っているモノ情報カードに記載されている。「みんなばっく」は、

単に民族資料の体験にとどまらず、このように解説情報や映像資料を教師が授業の展開に合わせて子どもたちに提示することで、学びを深めていくように工夫されている。

### 学校と進める協働プロジェクト

民博では、昨年度から民博の文化資源を学校現場で効果的に活用できるように学習プログラムの開発と試行に関するプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトでは、ひとつの授業のいろいろな過程で「みんなばっく」の利用や民博への見学などを取り入れた授業プログラム作りを、民博と協力校との協働でおこなっている。プロジェクトリーダーは、海の中道海洋生態科学館の館長で、教育プログラムを館の看板メニューに育てた実績をもつ高田浩二客員教授である。筆者は当時、情報企画係の博学連携スタッフとして、高田氏のアドバイスをもらいながら、協力校とのプログラムおよびワークシ

### 授業のプロセス



### 研究者の世界



トの開発と試行に関わる機会を得た。プロジェクト発足当時からプログラムの開発と実践を協力して進めてきたのが、冒頭の泉丘小学校の中野先生である。今年度は、昨年度と同じく五年生の二学期の「総合的な学習の時間」を使って、国際理解をテーマに、プログラムの開発と試行をおこなってきた。

六月から始まったプログラムの打ち合わせで、中野先生からは、民博の展示場での取り組みを授業全体の中

心的な活動に位置づけたいということ、そして子どもたちに民博で働く人との出会う機会を設けたいという希望があった。話し合いを重ねていくうちに、展示場での活動を授業全体の文脈のなかでどのように位置づけ、そこに向けて、子どもたちの学びへの意欲や期待をいかに盛り上げていけるかがポイントになるといふ点で一致した。そして研究者との出会いをきっかけに、子どもたちが民族学研究者になり、「みんなばっく」を使った下調べを経て、

研究の営み、学びの営み

発表後に記された子どもたちのコメントには、活動のなかで生まれたさまざまな思いが詰まっていた。「世界にはいろいろなものがある」「(身の回りのモノと)似ている物もあったけどぜんぜんちがう物もあった」とは、世界の人びとが使うモノの多様性への驚きと同時に、自分たちの暮らしとの比較から得た言葉だろう。彼らの視点は、モノの多様性とともならず「それぞれの地方にそれぞれの生活があった」というように、そこに生きる人びとというように、そこに生きたモノの経験と記録を通して異文化との対話の経験(「フィールドワーク」)をまたやりた「フィールドワーク」をまたやりたい」という言葉で記してくれた。そして「モノから疑問がわいた」という一言を残してくれた子どもは、研究者のまなざしを少なからず体得してくれたにちがいない。中野先生をはじめとする先生方も、子どもたちが自分で対象を決めて調査を意欲的にこなしている点を評価していた。

この授業プログラム作りを通じて筆者は、博物館は研究の成果はもちろん、成果を生むまでの研究者のまなざしや思考、そして課題と向き合う彼らの姿勢そのものも学びの素材として成立するだろうと実感している。三月一六日から始まる特別展「みんなくっスワールド」でも、民博の研究者の部屋が再現されることになっている。ここでは、研究の際に用いる道具や資料を実際に手に取って確認してみることで、研究者が味わう発見の喜びや葛藤も経験できるだろう。学校関係者向けには、「みんなくっ」の展示コーナーや民博利用に関する相談窓口も開設する。本展は子どもに育まれてきたかを、さまざまな民族資料を通して紹介する、体験的要素にあふれた展示である。

今回、授業プロセスとの対応を試みた民族学研究者の営みは、「成果の発表」という段階を終えたからといって完結するわけではない。その営みは、発表後のさまざまな反響から新たな問題を発見し、次の調査に向けた準備をはじめとする循環運動を続けて深められていくのだ。子どもたちにも、異文化との出会いをきっかけに生まれた新たな興味関心、そして解決し得なかつた疑問を探求していきたくいう、学びの営みを持続していつてもらいたいと願っている。



野林助教授がリュックから取り出す道具に子どもたちも興味津々



127通りのフィールドワークが展示場で展開した

異文化のモノにあふれる展示場でフィールドワークをおこない、その成果を発表するという流れができあがった。図にもあるように、「みんなくっ」の利用以降の活動の流れは、研究者の仕事のプロセスと一致するように組み立てた。

民族学者と出会い、民族学者になってみる

プログラムは、家にある外国からやってきたモノを調べるといふ夏休みの課題から始まった。子どもたちは、普段から見慣れたモノと向き合い、その新たな一面を発見し、使う人びとの思いや記憶がモノに刻まれていることに気づくことができた。続く「民博教員の出張授業」では、台湾や中国で、イノシシやブタと人との関係に関

する調査研究を続けている野林厚志助教授が、教室を訪ね、民族学や民博のこと、そして研究者になつたきっかけなどについて子どもたちに語った。また、調査にもついでリュックサックから、計測用の機器から下着までを次々と取り出し、たとえば「夜中に屋外にあるトイレに行くときには、このヘッドランプが必需品」といった具合に、使う場面や用途を紹介していった。フィールドワークでは、調査結果をスケッチとメモで記録する。子どもたちは、夏休みの課題でおこなったこととの共通点に気づくことになった。

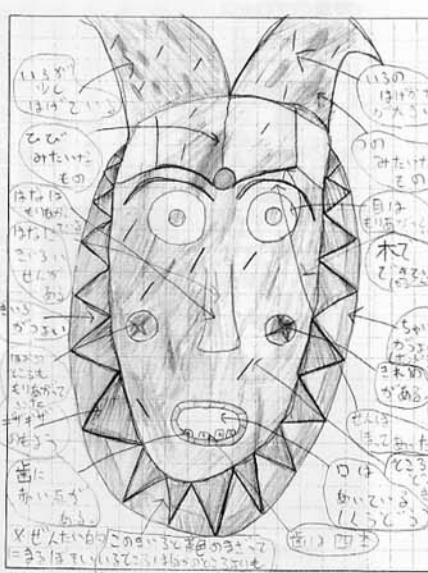
野林氏の研究の進め方やフィールドワークについての語りも、子どもたちの「調査」へのイメージを具体化させた。それは、「みんなくっ」を使っておこなった下調べでの彼らの意欲的な姿

を見れば明らかだ。イスウィットのブーツを人念にスケッチし、サイズをはかって記録する男の子。ダブルコートの手口からのぞく美しいフェルトの模様や、腰部にほどこされた不思議な出っ張りを見せ、うれしそうに筆者に教えてくれた女の子。みんな自分で発見した情報を記録しようと夢中になっていた。調査の準備の段階では、下調べで生まれたモノやその地域に対する各自の興味や関心を、展示ガイドや民博のウェブページを見ながらふくらませて、展示場でのフィールドワークの対象となるモノを決めていった。

一〇月一四日、泉丘小学校の二七人の民族学研究者たちは、入念な準備を経て民博を訪れた。これまでの活動を研究者の仕事と重ね合わせ、振り返り、今日のフィールドワーク

の意味を確認したあと、各自のフィールドに足を踏み入れていった。展示場では、用意したフィールドノートを使ってモノの観察と記録をおこなったほか、ビデオテープで実際にモノが使われている光景を確認したり、学習コーナーで関連図書を調べたりした。

フィールドワークを終えた子どもたちは、調査で発見したことや、疑問に思ったことを図書室やインターネットを使って探求していった。そして最後に、学習発表会「世界の文化を知ろう」——民族学者になって調べてみました」で、保護者と六年生に対して成果を披露した。クラスごとに「世界の楽器」「モンゴルの家」「韓国の遊びと衣服」「世界一周旅行」というテーマで調べたことを発表し、フィールドワークの成果も壁に掲示して紹介した。



豊中市立泉丘小学校5年生の男の子が、ナイジェリアのイビオ族の仮面について記入したフィールドノート。選んだモノのスケッチをして、特徴を書きこむように作られている

表紙モノ語り  
お化けの金太

特別展「みんなくっスワールド」出展作品/お化けの金太(標本番号H12085、高さ16cm 幅5cm 奥行7cm)

日高 真吾  
文化資源研究センター



わけだが、目玉の間隔が広い。紐をきちんと引く張らないと表紙のような白目になり、まさに「お化け」みたいになる。このようなおどろおどろしさも、この玩具のもっているおもしろさだ。

「お化けの金太」もそうだが、郷土玩具は日本各地の風土や伝承を題材として作られる。木や土、紙などの身近な材料を使って、子どものために

作った玩具が起源となる。江戸時代にこれらの玩具は、社寺の縁日や門前市などで売られ、参詣者らの土産物として全国に広まり、玩具の主流となつていった。明治時代になると、西洋諸国との交流が進み、ブリキやセルロイドで作られた西洋の玩具が国内に大量に輸入された。そして、これらの玩具は、たちまち全国を席巻し、それまで不動の人気を誇っていた郷土玩具を押し

けていったのである。

現在、郷土玩具は国内外の旅行者のお土産品として人気を博している。これは、郷土玩具が日本の伝統的な玩具であり、その素朴なたたずまいに魅了される人が多いからであろう。しかしながら、他の伝統技術と同様に、製作者の後継者不足という問題を抱えているものも多く、若手の後継者の育成が望まれているのである。